
Folmnoid

すずね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Folmnoïd

【Nコード】

N9536A

【作者名】

すずね

【あらすじ】

彼はまだ知らなかった。

母親が死んでから、周りの状況はもちろん、自分自身に対しても関心がなかった。

けれども、彼らに待っていたのは、常識を逸した世界だった。

第一話く普（しらない）通く

普段は落ち着いていて、おとなしい雰囲気。

秀でた才能があるわけでもなく、目立たない存在であったのに…
…その日から違った。

来る日も来る日も雨が続く。晴天の空を見たのは七日も前だ。

天気が変わるだけこれほどまでに気分も変わってしまうものだろうか。

今日は学校を休む　　いや、今日も学校を休む。

最近、感情の制御が難しいと意識してしまうことがあった。なにげない友達の言動から、怒鳴る先生だったたり、母親の言葉だったり…しかしそんなものは関係なくなってしまうた。

自分は自分、という考えが浮かんだ。

母が、死んだからか？　　そうなのか？

六日前に母が死んだ。三日前に葬式を行い、今日終わった。家の前の花輪が片付けられ、葬式用具も、灰となった母も墓石の中に眠った。

父と共に……。

学者の身でありながら、母は忙しい仕事の合間を見つけて夕食にたどり着く。

夕食を作るのはいつも自分だった。

食事を終えると、母はまた仕事へと戻る。二度目の、行ってきます、を言っで。

そして、死んだ。

交通事故だ。

対向車線からはみ出したトラックと正面衝突。運転手は、免許の持たない学生。本人の証言では、「遊び半分のもり」だったらしい。

勿論刑事事件になり、公になるも相手は未成年。それなりの罪を

被るが、彼への罰はあまりにも小さすぎる。

それが許せない。

加害者は自分の通学する学校から近く、友達もその学校に通っている。

友達は自分を慰めてくれた。

母の通夜。

多くの人 特に母の学者仲間の人の中に紛れて友達がいた。

そのときは、衝撃のあまりに何も話さなかった。

母が死んだのだ。

それ以上の悲しみはなく、駄目だった、何も話せなかった……。

母を殺した奴は罰を受けた。そう考えられるようになれば自分の気持ちも変わる……かも。

そう、信じたい。

と、玄関をノックする音が聞こえた。

雨の音でもわかるくらい、強いノックの音。

相手はわかっている。学校の先生、母の知り合い、加害者家族、友達……。

「鈴音、いるの？」

声は友達だ。

それも、近所の幼馴染。

名前は理緒、不思議な名前だと思うが、自分もそんなことは言えない。

自分の名は鈴音だ。

女の子と間違えられる。“すずね”と呼ばれることが何度もあった。

当て字のような、適当な気もするが、母が言うには医者に女の子と言われてそのような名にしたらしい。

「居るんでしょっ?」

玄関の扉を開け、理緒が入ってくる。まったく、いつもこれだ。

ドアの解除番号をいつの間にか入手し、許可なく踏み込み、二階

に上がって自分の部屋に入ってくる。

そしていつものように、

「学校、今日も休むの?」

「……今日も休む」

「みんな、心配してるよ。伊緒も、心配してた……」

お前はどうかんだ。

お前は心配しないのか? いつも他人の気持ちばかり気にして、まるで他人の意見を代弁しているみたいで苛立つ。

自立という言葉から遠い女の子だ。

自分の意見はどうした? 誰が心配しているとかではなく。

お前自身はどうかんだ。

俺をどう思っている? 理緒、お前は俺に妙に優しい。

伊緒もそうだ。お前から双子は少しおかしい。男はお前たちが思った以上に馬鹿なんだ、勘違いするかもしれない。すでに勘違いしている。

「ねえ、鈴音」

「俺に構うな、明日行くから……」

「明日は休みだよ……ばか」

「……」

鈴音は寝返りをうつと、理緒は椅子に座って鈴音の傍に寄る。

理緒と目を合わせる。

祖父が外人らしく、曇った燈すい色の瞳。妹の伊緒も同じで、今年高校卒業というのに、身長は二人とも平均以下。声も少女のままだ。

小学生がそのまま大きくなった感じだが、しっかり成長している部分もある。

伊緒もそうだが、胸が豊満だ。

二人を比べるなら、恐らく理緒の勝ち。目の前の、下から見上げる理緒の胸には魅惑の二つの山にしか見えてこない。ただ気になったのは、

「また大きくなったか。胸？」

普通なら抵抗する発言や行動とる。しかし、今の質問に対する回答は、

「たぶん、そうかも。だって重くなったもん」

そういつて理緒は両手で胸に触れる。

まるで恥ずかしさを知らない無垢の子供。

それが鈴音の理緒に対する印象だった。

「ねえ、鈴音。行こうよ、学校」

と、次に何をするかと思ったら、突然ベッドに潜り込んで来た。

「なんだよ」

うれしさより鬱陶しさがきた。鈴音は理緒に背を向けて反対側にある窓を見る。

カーテンの向こうから雨の音が聞こえる。

「子供の頃は、伊緒も一緒に寝たね」

うれしそうに理緒は言う。

確かに、昔は仲が良かった。

中学校が別だったため、再会したときには友達。というより、ただの知り合いだけとなった。

鈴音自身は、対して気にもとめなかったが、理緒は大分傷ついたようだ。それほど女性の心は脆く、理緒は子供だったと今は後悔している。

だからなるべく優しく接している。そうすると理緒は、まるで自分が好意を持って接していると勘違いした。だから理緒も鈴音に優しく接する……俺も理緒も、好きな相手は同じだった。

しかし、これは行き過ぎだ。

「どうしたの？」

黙り込んだ鈴音に理緒は、鈴音の背中から両手を回して抱いた。

「それ以上すると、襲つかもしれん」

自分の感情を抑えると同時に、理緒に自分の感情を教える。が、

「鈴音は、そんな人じゃないよ……」

完全に安心仕切った様子で、理緒は顔を深く鈴音の背中に沈め、身体を強く押し当てる。その胸の感触に鈴音はとうとう動揺を隠せず、衝動を駆り立て布団を勢い良く理緒と自分に深く被せ、

「理緒……」

「ち、ちよつと鈴音。ま、待って。まだ……い、あつ、だつ……え

? 駄目!」

「ん? なつ!?!」

理緒は、暴れ、膝で鈴音の股間を蹴り上げた。

ブレザーが脱がされ、ワイシャツのぼたんが外され、とにかく服装が淫らになっていた。スカートの下の、純白の下着も少し脱がされていて、理緒としては初めての経験かなりの焦りを感じた。

一方の鈴音は、股を強く蹴られたことで、本気で学校に行けなくなりそうだった。

この痛みは当分引けそうにない。

仕方ないから学校に行く。

鈴音は制服に着替えて、遅刻ギリギリで学校に到着した。

いつも通り学校 変化したのは自分だけ。

教室の雰囲気は最悪だった。

友達はおはようと挨拶するも、その顔には本心が見えた。

どう接すればいいのかわからない……。

全員が鈴音を見るが、誰も鈴音に興味がないような素振りをした。あまり良いとはいえない。

予鈴が鳴り、誰にも接することなくに四時間目が終わった。

昼食の時間に入り、鈴音は一階の購買部で弁当を購入。いつもなら、朝早くに起きて母が作ってくれた弁当か、気を利かせた伊緒の弁当なのだが、伊緒は教室の端で友達と弁当を食べている。

こちらに接しようとする気配はない。

理緒の姿が見えないのが気掛かりだった。

教室が違うから会わなくても別に問題はないのだが、朝になる毎日迎え来るし、お昼も伊緒と一緒に食べている。

鈴音の隣では友達が笑いながらパンを頬張る。

「鈴音、購買部で買ったの？」

後ろから、突然声を掛けてきたのは理緒だった。

未だ朝の出来事で気まずい雰囲気、鈴音に対して、理緒は屈託のない笑顔で両手の物を強く握った。

それは理緒が作った手製のお弁当。

すでに買った弁当を完食した鈴音に、その弁当を食べる余裕はない。

「明日頼むよ」

「だから明日は休みだよ……ばか」

「……」

弁当の蓋を閉じてごみ箱に投げる。

気を利かせた友達が「ナイスシュート」というと、鈴音も理緒も笑みを浮かべた。

「じゃあ、明日お弁当作ってあげるから、一緒にお出かけしよう……」

鈴音の反応に怯えているのか、笑みを消し、自信なさ気に理緒が言う。

明日、出掛けよう。

……たまには出かけるのもいい。学校にもしばらく来ていなかったが、外に出ると気分がいい。

母を忘れることはできないが、母のことを考えずに済むかもしれない。

鈴音は、楽しい気持ちを胸に、黙ってうなづいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9536a/>

Folmnoid

2010年10月28日04時21分発行